

『古代アメリカ』2, 1999, pp. 93-96

## <書評>

加藤泰建・関雄二編

『文明の創造力 古代アンデスの神殿と社会』

東京：角川書店 1998年

324+26頁、定価3,400円

高山智博（上智大学）

本書は1958年から1998年までの40年間にわたる、東京大学アンデス調査団の歩みとその成果を一冊の本にまとめたものである。

わが国においてアンデス研究がはじまったのは、序章で、加藤泰建（以下、敬称略）が記しているように、「東京大学アンデス地帯学術調査団」が結成され、その第一回調査団が派遣された1958年のことである。これはまた日本人によるラテンアメリカ研究の本格的な幕開けでもあった。

東京大学では1956年から江上波夫を団長とするイラン・イラク発掘調査団の活動が開始されていたが、それとこのアンデス調査団とは、まだ暗い世相だった日本にとって、まさに夢をかき立てる一大イベントとして映ったものである。

それは第一回アンデス調査団団長・石田英一郎が述べているように、この調査の目的が、「両者の比較研究により、人類文明の形成の過程、特にその普遍的な条件や形式を明らかにしたい」という氣宇壮大なものだったことにもよう。

その第一回調査団が出発する直前に開催された、「インカ帝国文化展」は大変な盛り上がりであった。その会場となった東京新宿の伊勢丹では、連日、入場を待つ長蛇の列ができたのを、私はつい昨日のように思い出すのである。

その私がアメリカ大陸の古代文明に関心を持つようになったきっかけは、1957年に来日された、R. Heine-Geldern前ウィーン大学教授の講演を聞いたことによる。もし教授がいわれるように、アメリカ大陸の古代文明の発生にアジアからの影響があったとすれば、それを自分でも調べてみたいと思ったからである。この仮説は当時、わが国でもかなり話題となつたものだ。

第一回アンデス調査団はペルー、ボリビア、チリにわたる広範な地域の一般調査を行つた。最初の主要な調査地となったコトシ遺跡で発掘が始まつたのは、1960年、泉靖一が団長となつた第二回調査団からである。この遺跡の発掘における最大の成果は、「交差した手の神殿」と命名された神殿社の発見だが、これは紀元前2500年にさかのぼる先土器時代に造られた神殿、つまり従来の常識を覆す画期的な発見だったのである。

しかし1968年に、発掘主任だった曾野寿彦と第一回調査団団長の石田英一郎、さらに1970年には、泉靖一が急逝した。それはまるで神聖な神殿を掘り起こしたことに対する、神のたたりではないのかと想像したくなるような出来事だった。実際は発掘や公務の他、学会やマスコミでの活動など、分割みの多忙さによる過労が病気の引き金となつたのだろう。ともかく各人ともわが国の学術研究のために殉職されたのだといえよう。

1975年に再開されたアンデス調査団を率いたのは寺田和夫であった。その時から調査団の名称も、「核アメリカ学術調査団」と改められた。アメリカ大陸にかつて存在したもう一つの古代文明

が栄えた地であるメソアメリカも調査の対象に入れた上での改名だったが、結果的にはアンデスに限定された。この調査団はペルーの北部に位置するカハマルカ地方に焦点を当てた。その地方にあるワカラマ遺跡の調査を徹底させることの重要性が認識されたためだということである。

だがその寺田和夫も、1987年に他界された。そこで1988年からアンデス調査団を引き継いだのが大貫良夫である。調査団は再び、「古代アンデス文明調査団」と改名された。この調査団は、クントゥル・ワシ遺跡でのアンデス文明最古の黄金細工の発見とその地に建設した博物館とで、国際的な名声を勝ち得た。

本書は、東京大学アンデス調査団の長年にわたる調査活動と研究成果の集大成だといえる。以下、第一章から第六章まで、章を追いながら、その内容の紹介と論評を行いたい。

第一章では、1960年に始まるコトシュ遺跡の発掘の有り様が、その最初から参加している大貫良夫ならではの筆致で描かれている。63年と66年の調査時には、ペルーの考古学専攻の学生たちを発掘作業に受け入れたが、彼らは後に、大学、文化庁、博物館でしかるべき地位に就いている。彼らが様々な形でアンデス調査団を支援してくれたことはいうまでもない。東京大学のこの例は、現地の人々との学術交流がいかに重要な教訓である。

コトシュの発掘における最大の成果は、63年の調査時における「交差した手の神殿」の発見であった。聖なる場所を具現化したこの神殿の中心には、炉が置かれ、南側に面した入口から正面に当たる北壁には、人間の腕が交差したレリーフが二つ取り付けられていた。これらの腕は左右対称の位置と腕の太さと重なり方の微妙な違いから、男女の腕、さらに男女に象徴される二元性あるいは双分原理を意味すると考えられている。確かにこれは古代アンデスの基本的な宇宙観の一つを表現した貴重な証拠だといえよう。

「交差する手の神殿」が有する学問的意義は、土器が出現する以前に神殿が造られたとは信じられないとする、当時の常識からか、1964年にバルセロナで開催された国際アメリカニスト会議では、あまり評価されなかつたらしい。ただしその数年後には、米国の学者などから正当に認識されるようになったことは言をまたない。

その前回の国際アメリカニスト会議、つまり1962年にメキシコ市で行われた会議において、伝播論者のHeine-Geldernが、アメリカ大陸の古代文明は独自に形成されたとするメキシコの A. Caso によって痛烈に批判されるのを、メキシコ留学中だった私は、目の当たりにしたが、それは極めて印象深い場面であった。

第二章は、「核アメリカ学術調査団」の活動についての報告である。その発足当初、私は寺田和夫教授からメソアメリカのプレオルメカ期の遺跡について聞かれたことがある。メキシコのチアパス高地やグアテマラ高地がその候補地になるだろうと答えたものだが、結論として、調査地をアンデス地帯に限定したことは正解だったといえよう。その理由の一つとして、日本人の発掘に対して、ナショナリズムの傾向が強かったメキシコの学者やマヤ地域の研究をほぼ独占していた米国の学者の承諾を得るのが、かなり難しいのではないかと危惧したからである。

この調査団はワカラマ遺跡の10年にわたる発掘で、形成期の編年を確立した。そのアンデス地帯の編年とメソアメリカにおける編年がかなり類似している点に、いま一度注目すべきではなかろうか。それは両地域間における文化の伝播を意味するのではなく、世界規模の気候変動に対応して起こった文化変化を示唆しているのではないかと考えるからである。

その一例として形成期中期（紀元前1200-800年）のアンデスでは、ジャガー、蛇、鳥といった動物の属性を持つ神が信仰されるようになるが、メソアメリカのオルメカでも同様な神が出現する。気候変動などの結果、大規模な食糧危機が生じたとき、当時の住民が神罰と考えたことは想像に難くない。つまりこの時期に出現する恐ろしい形相の神は、自然を支配する神の怒った姿を表現した

ものと解釈出来ないだろうか。この神の仲介者を任じる神官たちは強大な権力を握り、さらには交易ルートも手中におさめて、その信仰を各地に伝えたのだろう。

第三章はチャビン・デ・ワンタルとクントゥル・ワシについての解釈に当てている。「古代アンデス文明調査団」に形成期の重要な遺跡であるクントゥル・ワシの発掘許可が与えられたのは、長年にわたる東京大学の学者たちの学問的努力と誠実な態度に対する、ペルーの学者たちの信頼の証しと受け取ることができよう。

チャビン・デ・ワンタル神殿の成立は紀元前900～800年であるが、これは大貫が名付けた「海岸空白」の時期とほぼ合致するということである。太平洋岸の「海岸空白」と呼ぶ時期は、エル・ニーニョのような自然現象がもたらした大災害の結果ではないかと推測されている。ペルー北部では海岸地帯の神官たちが、山地のクントゥル・ワシに移動し、そこで新たな創造が行われた。その中心となるのが神殿の建設であった。つまりこれは、自然現象の変化と連動する文明形成のメカニズムが明らかになってきたということだろう。

第四章では、形成期末期（紀元前250～50年）に起こった事象について扱っている。それは従来の神殿中心の世界が勢力を失い、新たなエリート階層が台頭してきた時代である。それまで力を誇示してきた神、ないし神々の図像が、生活基盤に変化が生じた社会の要求にとって、役立たずのものとなり、姿を消していった。その図像を通して達成してきた社会統合が不可能になったことを意味している。エリート階層について閑雄二は、「神官集団の流れをくむ者たちであった可能性は高いが、あらたな生業がもたらす経済システムの統制を司り、地域間の交易ルートを握り始めることで、形成期の神殿に決別を告げようとしていた人々の代表格であった」と見ている。私もこの時期が次の地方発展期社会への橋渡し的な役割を担っていたと考えるが、形成期の神や宇宙観については、その重要性に濃淡はあっても、アンデス文明の基盤として、時代ごとに少しづつ姿を替えながら、インカ帝国の時代まで継承されたのではないかと思っている。

第五章では、1960年から東京大学を定年で退職された1998年まで、アンデス調査一筋にやってきた大貫良夫が、発掘にまつわるエピソードや苦労話を包み隠さず披露しており、読む者を感動させずにはおかない。特にクントゥル・ワシ遺跡から黄金細工が出土したことは、「まさに神のご加護ともいるべき大発見」だったといって過言であるまい。さらに遺跡のそばに、地元民のための博物館を建設したこと、アンデス調査団に対する評価も高まった。大貫はいう。「今、かつてのラ・コンガ村はクントゥル・ワシ村と正式に名称を変更したが、村の中心となる広場や建物はない。むしろ村民が村の自慢にすることは遺跡と博物館なのである。クントゥル・ワシ遺跡は、現代の神殿としてよみがえった」と。

村民が先祖の文化遺産を誇りに思うようになったことは、スペイン人によるインカ帝国征服以来の出来事だろう。この意味でアンデス調査団が、彼らに意識改革の種を蒔いたことは、まことにすばらしいことだいえる。しかし貧富の差が大きい階級社会が未だに残存するペルーでは、先住民が自らの文化やアイデンティティを主張することは、非先住民との間に摩擦が起きる引き金ともなりかねない。その意味でアンデス調査団は今後、発掘とは違った、新たな挑戦にも立ち向かわねばならないのかも知れない。

第六章は、本書の結論といるべき部分である。そこで閑雄二は、「神殿こそ『文明の創造力』を生み出すひとつの原動力となった」と述べている。アンデス文明は農耕を主な基盤として形成された文化であり、その中核として自然を支配する神の家、つまり神殿が存在したということではなかろうか。

最後につけ加えたいことは、本書がアンデス考古学に関心がある者だけでなく、わが国のラテンアメリカ研究者一般にとっても、必読の書だと断言できるということである。

